障害児ケア専門家配置

新聞を毎日じっくりと読むが、安保法案など安倍政権の話題が大半を占めてしまう。27 日の朝日新聞で表題の小さな記事に目が止まった。京ちゃんのことを考えながら、記事を集中して読んだ。記憶に残すためにも、記事を書き写しておこう。

小中学校などで障害のある子とない子がともに学ぶ環境をつくるため、文部科学省は専門家や支援員を学校などに配置する方針を決めた。教室で重度の障害のある子のケアをする看護師や、教員に教え方を助言する専門家の手を借りる場合、国が費用の一部を補助する。来年度予算の概算要求に 15 億円を計上する。

障害のある小中学生は、昨年 5 月時点で特別支援学校に約 6 万 9 千人、特別支援学級に約 18 万 7 千人。通常の学級に所属しながら特別な指導を受けている子も約 8 万 4 千人いる。いずれも 10 年前に比べて増加しているが、自治体によって専門家のサポートはまちまちで、教員が中心に対応していた。ただ、他の子の勉強や生活も見なければならない教員には 1 人にかけられる時間に限界がある。そこで、看護師約 1460 人や、特別支援学校 OB などの協力員約 350 人、理学療法士などの専門家約 430 人などの配置を目指す。

この記事を読んで、京ちゃんの運動会を思い起こした。5 月 28 日のレポートにも書いたが、堀田小学校の運動会に行き、学校での京ちゃんの様子を見ることができた。4 年のクラスで熱心に学ぶ京ちゃんは、しっかりクラスにとけ込み、赤組「応援団長」として役割を果たしていた。

京ちゃんをサポートしていたのが、看護師さんと担当の先生である。こうしたケアなくして、京ちゃんの学校生活は成り立たないであろう。ご両親から話では聞いていたが、実際に学校で、それも運動会でケアする様子を近くから見ることができ、専門家としての役割の大切さを実感した。

今回やっと国が「障害児ケア専門家配置」に動き出すようだ。まだ概算要求の段階ではあるが、きちんと予算的にも制度化してもらいたい。これまでに京ちゃんご両親らの要望と運動により、名古屋市のような自治体でも、不十分ながらも専門家の配置が進められてきた。今後の国などの動きに注目していきたい。

（2015 年 8 月 29 日）